

第 66 回日本病跡学会総会シンポジウム『「アール・ブリュット」っていったい何?-膝の悪い人たちの芸術の今とこれから-』

二つのアール・ブリュット——戦後フランスと現代日本

2019 年 7 月 7 日 (日) 13:00~14:30

場所：龍谷大学 深草キャンパス 和顔館地下一階

服部正 (甲南大学)

アール・ブリュット、この言葉が日本ほど広く浸透している国は、世界のどこにもないだろう。母国フランスでも、余程美術に通暁している者でなければ、この言葉の意味は分からない。一方、日本では政策・施策を語る際にもしばしばこの言葉が用いられ、この言葉を冠した公的なプロジェクトを実施している自治体もある。その場合のアール・ブリュットは、言葉の元来の意味とはかけ離れたものとなっていることが多い。

周知の通り、アール・ブリュットはフランスの美術家ジャン・デュビュッフェによる造語だ。公的なテキストでの初出は、1949 年に自身が収集した作品をパリの画廊で大規模に紹介した展覧会「文化的芸術より好ましいアール・ブリュット」の図録だ。この中でデュビュッフェは、「膝の悪い人や消化不良の人の芸術がないように、精神病者の芸術もない」と宣言した。彼のコレクションの大半は統合失調症の患者によるものだったが、それ以外の作品も含まれていた。そして、アール・ブリュットという命名そのものが、作品を精神医療の文脈から切り離すことを目指すものだった。であれば、アール・ブリュットの「病跡」を研究することは果たして可能なのだろうか。

一方、アール・ブリュットの範疇で語られる作り手を数多く輩出してきた「グギング芸術家の家」の設立者で精神科医のレオ・ナヴラチルは、自身が設立した施設の作品を高く評価したデュビュッフェに敬意を表しつつも、「膝の悪い人の作品は見分けることができないが、統合失調症の患者の作品は見れば分かる」と反論した。つまり、アール・ブリュットの表現の多くには病気の刻印があるというのだ。ナヴラチルのこの指摘は正当なものだろうか。もしそうならば、なぜアール・ブリュットには患者の作品とそれ以外の作品が混在しているのだろうか。

デュビュッフェが精神科病院で作られる作品に関心を持つ契機のひとつは、若い頃に本で知ったハイデルベルク大学附属精神科病院のコレクションだった。収集者の名前を取って「プリンツホルン・コレクション」と呼ばれるその作品群に対して、デュビュッフェは大いに刺激を受けたことを認めつつ、後に実際に見た時にはがっかりしたと述べている。それはなぜか。アール・ブリュットはデュビュッフェ自身の審美眼と深い関係があるからだ。

20 世紀の中頃にデュビュッフェの個人的な収集物に付された名前を、文化的文脈も歴史も異なる 21 世紀の日本の障害者福祉政策・施策に用いることの利点は何か。そこに弊害はないのだろうか。20 世紀フランスと 21 世紀日本のアール・ブリュットを比較検討する。